

酷暑

稲宮健一

手紙でたよりを書いていたころ、盛夏御見舞い、とか残暑御見舞いという挨拶文があったが、酷暑御見舞いという前書きはなかった。今年は七月の半ばから、八月の半ばにかけて正に酷暑であった。地球温暖化によるものと思われる。過去にも気象の変化はあったが、産業革命から現在までの短期間に二酸化炭素の大気中の濃度の増加と正比例して気温の変動が激しくなってきたのを他の要素から説明できない。じゃ、どうしたらいいのか、短期で単純な解決策などあるわけがない。産業界では排ガスから二酸化炭素を分離し地中に埋めるとか、さらなる自然エネルギーの活用など着々と進められているようだ。

素朴な方法だが、原因と思われるものを一つ一つづすしかないと思われる。一九七五年、高度成長が始まる頃、浜松町の貿易センター、三七階の事務所で働いていた。朝早く事務所に出社すると、道路より少し上は煙幕のように汚れた空気が淀んでいた。お昼頃になると、温められた空気が上昇し、ひどい時には隣のビルも霞がかかったよう見えにくくなる。しかし、今は、晴れた日は富士山まで見通せる。これは一つ一つの排気ガスの規制の努力の結果だ。

その頃、川も汚れていた。二子玉川に野川が流れ込む、未処理の生活用水が流れ込む、丸子多摩川の取水堰には洗剤の泡が高く舞い上がっていた。でも、今は鮎が遡上するほど水質が改善されている。正に下水道の整備と比例関係にある。水俣病も、駿河湾のパルプの廃液も、意識されてから長い時間がかかったが、過去の努力が教科書に載るのも事実だ。

さて、トランプ大統領が温暖化は嘘だと言ってパリ協定を離脱した。専ら短期な損得勘定に惑わされ、今の現象を長期的な地球の寒冷期、間氷期など、長期の地球の気候変動と混同しているでないか。直近の人為的な大量生産、大量廃棄の時代の地球環境を理解できてない。かつて、環境保護の先導者だった、ラルフ・ネーダーの現代版が現れて欲しい。